

の、しばらくの時間の経過とともに、またもとの改善すべき状態に戻ってしまうという教育上の課題が指摘されて久しい。この課題の解決のためには、教育対象者自身による主体的な健康問題解決意識の醸成と、個々の内発的動機や自己学習・自己実践能力を涵養するような新しい教育方法の開発等が求められている。主体的学習能力の育成等を目的として開発された健康教育T Y A方式は、地域の各特性を踏まえた多様なシナリオ教材の開発や、教育担当者であるチューターのトレーニングの体系化等に着目し、教育方法及び評価の観点から総合的に改良が進められている（竹森他, 2005. 浅田他, 2005.）。

II. 目的

本発表では、シナリオ・チュートリアルシステムを特徴に持つ健康教育T Y A方式における教授・学習活動中の、とりわけ教室終了6ヵ月後のクラス会における学習状況をもとにして、教室とクラス会との学習過程の関連の状況を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

2003年12月から2004年5月まで青森県N町において実施した減塩教室並びに2004年12月に実施したクラス会に参加をした地域住民25名を対象とした。研究方法としては、まず自然な状況における対象の反応を調べる視点から、評価担当者である大学教員（共同研究者）が教育プログラムに観察者・スーパーバイザーとして参加する形での観察法を採用し、同時に教育プログラムの企画書や教育用パンフレット、教材、対象者の発言録、報告書等の記録物を質的に分析する方法を採った。

IV. 結果及び考察

1 クラス会における学習過程

クラス会においては、①教室終了6ヵ月後の自分の検査結果への率直な感想を共有できる、②生活習慣改善のための自己実践を継続するための課題を討議できる、を教授・学習目標としてグループワークを実施した。クラス会における参加者の学習過程は、現在反応・実践経緯・将来方策という内容の経時的観点から、①検査結果への率直な感想、②実体験に基づく、結果数値の根拠の推定、③これまでの自己実践の振り返りと共有、④減塩への慣れに対する自覚、⑤学習成果の家族・地域への波及効果、⑥今後の実践目標や課題、展望に類型化できる（表1）。このうち①及び②は「検査結果を自分自身で今認識したことから派生した意見群」を構成し、③及び④、⑤は「これまでの自己実践を想起したことから派生した意見群」、⑥は「これからの採るべき方策をイメージ・導出したことから派生した意見群」を構成するものと捉えられる。

ポスター発表P-10

地域住民の自己学習能力育成をねらいとする T Y A方式の評価

第1報：教室とクラス会との学習過程の関連

浅田 豊¹⁾ 山本 春江¹⁾ 竹森 幸一¹⁾
工藤奈織美¹⁾ 千葉 敦子¹⁾ 山本理智子²⁾
沼山 詩帆²⁾ 小林 知美²⁾ 成田 彰宏²⁾

1) 青森県立保健大学

2) 青森県野辺地町

Key Words : ①T Y A方式 ②健康教育
③自己学習能力

I. はじめに

減塩教室等をはじめとする生活習慣の改善をねらいとする健康教育の実践では、当該教室開催中あるいは実施直後には減塩や生活習慣改善の成果が認められるもの

2 クラス会の前提となる減塩教室中に使用した、構造化されたシナリオのステージ1から4までにおける主要点・教育的意図

シナリオは4つのステージから成りそれらはレディネス・教授学習目標・登場順序性・学習優先度・相互補完性等の側面から体系的に構造化されている。また、教室の導入期ではステージ1が、同様に展開期では2が、総括・まとめ期では3及び4が使用されるよう配置されている。各期の学習到達点及び主要点・教育的意図は表2に示すとおりである。シナリオの主要点・教育的意図は、学習範囲に基づいて、①減塩を中心に食習慣の改善に関すること、②食習慣以外の生活習慣全般に関することに大きく分類することができる。

3 シナリオによる学習過程とクラス会における学習過程との関連

以上を踏まえ、シナリオによる学習過程とクラス会における学習過程との符合状況を基にして、クラス会における学習過程に関して、シナリオ・チュートリアルシステムが継続的な自己学習・自己実践へもたらす積極的な影響の観点から再類型化する。再類型は①シナリオから学習した内容に基づくと推察される意見、②チュートリ

アルによるグループワークを通しての学習活動が契機になったと捉えられる意見、③健康度測定や尿中塩分検査、調理実習を含むTYA方式による一連の減塩教室の総体的活動に関連した意見、④；①～③を基盤として自分に適合した自分なりの自己学習・自己実践の継続に関連する意見、⑤その他の意見群により構成される。再類型①に関して、表2中の「失敗例をも含む減塩のための様々な工夫及び取組」に関連する意見が12件、同じく「食品に含まれる塩分量」に関連する意見が5件など、①に関しては合計で32件の意見が認められた。また、②に関する意見が1件、③に関する意見が6件、④に関する意見が7件、⑤に関する意見が2件認められた。再類型結果より考察するとまず、対象者はシナリオ・チュートリアルシステムに基づく減塩教室で6ヶ月間学習した。教室実施期間中に、各自自分なりの行動目標を立案した。教室後は普通の生活に戻ったが、既習事項をもとに参加者は、「減塩は無理はしてはいけない。でも、これからも気をつけていかなくては」というような意識を有していたのではないかと推察される。やがて教室終了後6ヶ月が経ち、シナリオを読み返す機会は少ないと思われるが、即ちシナリオの記述表現をその語句のまま暗記してはいないかもし

表1 クラス会における学習過程 (2004年12月、青森県N町)

学習の到達点	◎6ヵ月後の検査結果への率直な感想の共有を経た、自己実践継続課題の導出
学習過程の種類と個々の学び(個々の学びはクラス会の教授・学習目標に照らし重要要素を抽出。重複分省略)	<ul style="list-style-type: none"> ○検査結果への率直な感想：「前回よりもクラス会の方が数字が良くなっている」等5件 ○実体験に基づく、結果数値の根拠の推定：「外食が多いと塩分量が高い」「煮込みうどんを食べたときに15gになったので、塩分上昇のことがよく分かった」等10件 ○これまでの自己実践の振り返りと共有：「食卓用醤油を、醤油とアルカリイオン水の3：1で薄めて使っている」「野菜の使い方が増えた気がする」等15件 ○減塩への慣れに対する自覚：「おひたしにも醤油をかけなくても良くなった」等3件 ○学習成果の家族・地域への波及効果：「果物を食べなかった夫がカリウムに影響があると知り摂るようになった」等4件 ○今後の実践目標や課題、展望：「減塩教室で学んだことをそれぞれできることを無理なくやっていく」「香辛料や酢を使う」等11件 <p style="text-align: right;">計48件</p>

表2 教室中に使用した構造化したシナリオのステージ1～4における主要点・教育的意図

各期	学習到達点	シナリオにおける主要点・教育的意図
1 導入期	シナリオへの自己投影過程を経た自分自身の生活習慣の振り返り	高血圧の問題、肥満の問題、家族成員同士の協力と学習成果伝達共有による減塩及びカリウム摂取、自己の主観的味覚と他者の味覚あるいは客観的塩分濃度との不一致、食品に含まれる塩分量、栄養バランスと食物摂取量、禁煙及び適量飲酒、高血圧自覚症状、運動習慣の重要性
2 展開期	シナリオにおける解決策を基盤とした自分自身の生活習慣上の改善目標の設定	失敗例をも含む減塩のための様々な工夫及び取組、自己の主観的味覚と他者の味覚あるいは客観的塩分濃度との不一致
3 総括・	これまでの自己学習・	塩分摂取に関する誤認状況、無理のある改善目標の例示
4 まとめ期	自己実践の総合的評価	グループでの討議及び地域における個々人の改善目標の共有の重要性、食品に含まれる塩分量

れないが、「こんなことは話し合ったし、学んだ」というようなイメージは残存していた可能性が推察できる。つまり、教室後に学習内容が完全に途切れ消失した訳ではない。教室最終回における6ヵ月後クラス会での再会予告がモチベーションの持続につながった可能性もあるが、教室期間中に主体的に問題解決に臨んだからこそ既習事項が動機付けとなり、自己学習・自己実践がさらに続いた可能性が、再類型結果から推察される。

V. 結論

青森県N町で2003年度に減塩教室並びに2004年度にクラス会を実施した結果、健康教育TYA方式の主な特質である①連続性のある複数のシナリオに基づいて問題解決的に学習が進む点、②チューターの支援のもとで対象者が自ら主体的に学習する点を背景として、同方式では、対象者の教室での学習と、クラス会までの継続的自己学習・実践との関連の可能性が示唆された。

VI. 文献

・竹森幸一, 山本春江, 浅田 豊, 秋田敦子, 山本理智子, 飯田貴子, 沼山詩帆, 小林知美, 仁平 将: 健康教育TYA方式の改良過程とその効果の分析 第2報 学習効果の評価. 青森保健大雑誌, 6(2), 63-68, 2005.

・浅田 豊, 山本春江, 竹森幸一, 秋田敦子, 山本理智子, 飯田貴子, 沼山詩帆, 小林知美, 仁平 将: 健康教育TYA方式の改良過程とその効果の分析 第1報 シナリオの構造化と学習課程の分析. 青森保健大雑誌, 6(2), 49-62, 2005.